

王家による統制によって治安の良いメルロマルクではあるが、他国に比べて規模はそれほどでもないとはいえずラムは存在する。

脛に傷を持つ者や浮浪者達で溢れるその区画は、同じメルロマルク国に住む民であっても、好んで立ち入る者はいない。

そんなラムの住民すら寝静まる深夜。薄暗い路地裏で寝ていた浮浪者に一つの『影』が近付き、その傍らにしゃがみ込むと、身体を揺り動かしながら声をかけた。

「……………きなさい。早く起きるのです」

「なんだあ？ 人がイイ気分で寝ていたらよお……」

眠りを妨げられた浮浪者は不機嫌な声を上げながら、寝ぼけまなこを擦る。

「貴方に用があります、早く目覚めなさい」

その『影』は女性の声で浮浪者に話しかける。こんな場所ですら聞く事の無い、品のある声音であった。

浮浪者は上体を起こし、それでもまだ寝ぼけた様子で声の方を見た。

そこに立っていたのは、ローブを覆った一人の女性であった。

「目が覚めたようですね」

気品を感じさせるその声と、顔の下半分を隠している豪華な扇子から、浮浪者は目の前の人物が高貴な身分の婦人ではないかと感じた。

その貴婦人は静かに浮浪者を見下ろすと、ゆっくりと扇子を畳み、その顔を晒した。

「えっ……………？」

浮浪者は目の前に現れた人物の姿に衝撃を受け、驚愕に目を見開く。

「ミ……………ミレリア女王っ!？」

浮浪者の声が思わず上ずる。いかにラムの住人とはいえ、自国の女王の顔ぐらいいは当然知っている。

そして、眼前にいる人物は、どう見ても女王ミレリアⅡQⅡメルロマルクその人であった。

「じよ、女王陛下が何故こんな場所に……」

この国の女王が、真夜中のラムで自分のような人間に声をかける、そんなあり得ない状況に浮浪者の思考は停止し、ただ呆然とミレリアを見つめていた。

その様子を意に介する事もなく、射抜くような冷たい眼差しのまま、ミレリアはそっと口を開いた。

「私がこの場にいる理由を貴方が知る必要はありません」
静かに——それでいて有無を言わさぬ言葉の圧力に、
浮浪者は緊張の面持ちを浮かべた。

「これより、メルロマルク女王として貴方に命令します」

「め、命令……!? アッシなんぞに一体……」

自分のような人間に女王が直々に王命を下す、そんな
ことがあり得るのか？

浮浪者は訳が分からず、目を白黒させながらゴクリと
唾を飲み込んだ。

ミレリアは少し笑みを浮かべ、命令の言葉を発する。

「私を貴方の奴隷にしなさい」

凛とした声で発された『命令』に対し、浮浪者は間の
抜けた表情を浮かべてミレリアを見つめ返した。

「あ、あの……今、何と……」

「聞こえませんでしたか？ 私を貴方の『奴隷』にしろ
と言っているのです」

「奴隷……に？ アッシが女王の？」

「逆です。私が貴方の奴隷になるのです」

表情一つ変えず淡々と話すミレリアに反して、浮浪者
の混乱は増すばかりであった。

耳に入る言葉は聞こえているが、その真意が掴めず、
まるで理解できなかった。

（奴隷になるって、一体……そのままの意味で俺の奴隷
になるって事か？ ミレリア様が？）

浮浪者は言葉を発する事も出来ず、ミレリアの言葉を
心の中で反芻しながら、さらに己に問い続ける。

（そもそも、今、目の前にいるのは本物のミレリア女王
なのか？ 女王がこんな真夜中にスラムなんかに来る筈
がないだろう。いや、しかし……）

浮浪者の脳内で様々な言葉がグルグルと渦巻き、一向
に考えが纏まらない。

その様子を無言で眺めていたミレリアだったが、無言
で身に纏っていたローブをその場に脱ぎ捨てる。

「っ!？」

混乱の中、目の前に現れた『信じられない光景』に、
浮浪者の思考は停止した。

ローブの下から現れたのは、黒い下着のみを身につけ
ている扇情的な女王の裸体であった。